

ポスターセッション

学生が主体的に学ぶ力を身につけるには

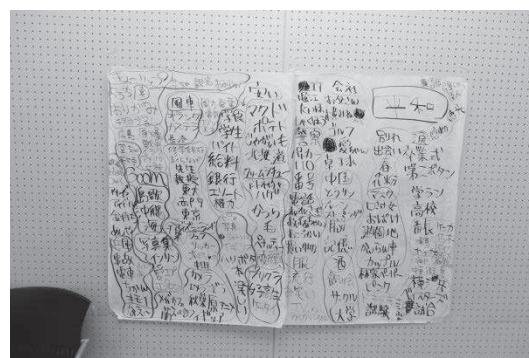
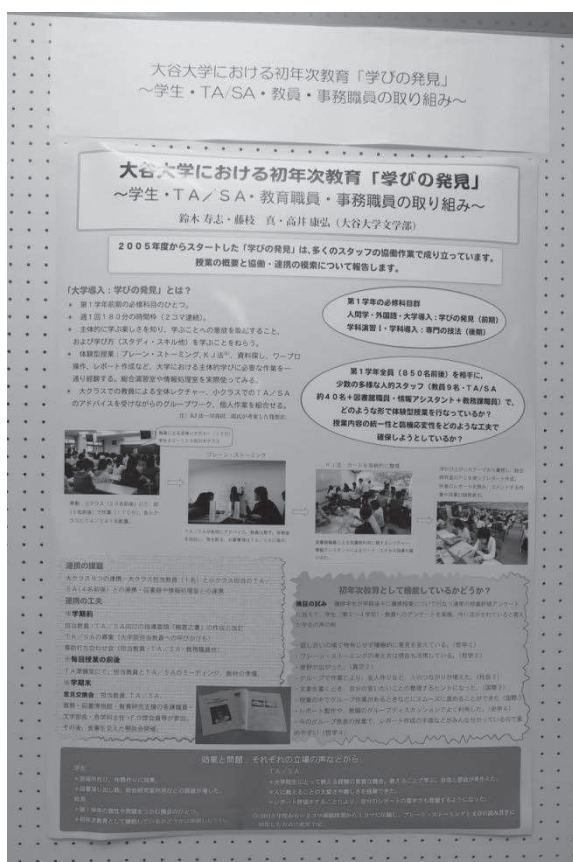
2/24 (日)

10:00-15:30 (コアタイム: 12:00-13:30)

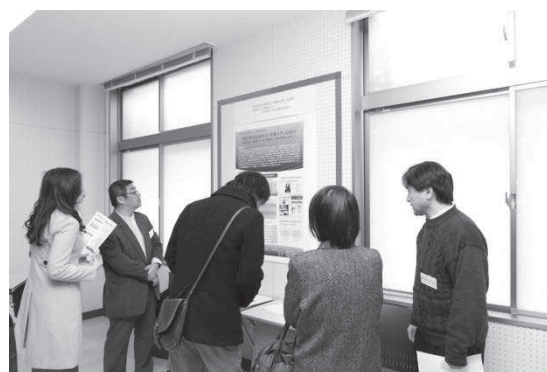
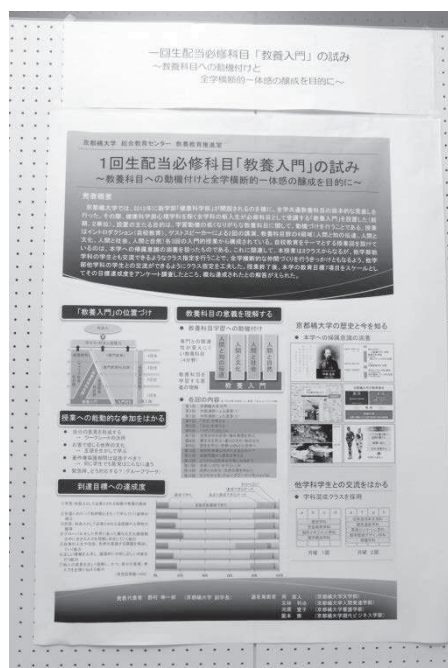
敬学館 1F 教室 233、235、239、240、241

FD に関する情報収集、参加者間の交流を目的として、ポスターセッションが行われました。
大学コンソーシアム京都加盟大学の教員、職員、学生が所属大学の特徴的な FD の取り組みを
発表しました。

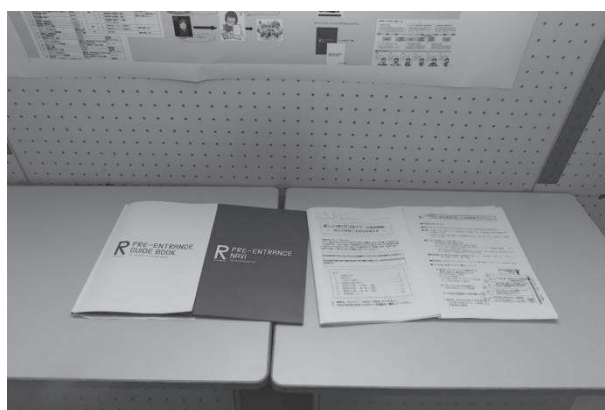
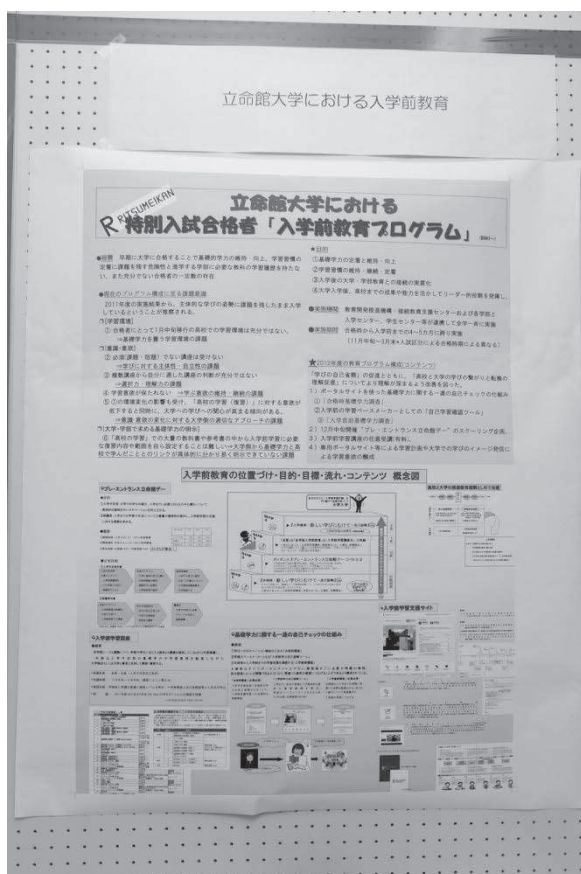
テーマ	大谷大学における初年児教育「学びの発見」 ～学生・TA/SA・教員・事務職員の取り組み～			
学校名	大谷大学			
発表代表者	鈴木 寿志			
連名発表者	藤枝 真	高井 康弘		
キーワード	主体的な学び		ブレインストーミング	
	KJ 法		ティーチング及び スチューデントアシスタント	
概要	大谷大学では、第1学年前期必修科目として「学びの発見」を開講している。大学で主体的に学ぶ楽しさを知り、学びへの意欲を喚起することを目標とし、ブレインストーミング、KJ 法といった体験型の内容を取り入れている。ティーチングアシスタント、スチューデントアシスタントによる指導を含め、小クラスでのグループ作業、個人作業を通じて、4年間の大学での学びの基本を身につけることができる。			



テーマ	一回生配当必修科目「教養入門」の試み ～教養科目への動機付けと全学横断の一体感の醸成を目的に～			
学校名	京都橘大学			
発表代表者	野村 幸一郎			
連名発表者	南 直人	北林 利治	河原 宣子	阪本 崇
キーワード	初年次教育		教養教育	
	自校教育		動機づけ	
概要	京都橘大学では、2012年に新学部「健康科学部」が開設されるのを機に、全学共通教養科目の抜本的な見直しを行った。その際、健康科学部心理学科を除く全学科の新入生が必修科目として受講する「教養入門」を設置した。設置の主たる目的は、学習動機の低くなりがちな教養科目に関して、動機づけを行うことである。授業はイントロダクション（自校教育）、ゲストスピーカーによる2回の講演、教養科目群の4領域（人間と知の伝達、人間と文化、人間と社会、人間と自然）各3回の入門的授業から構成されている。自校教育をテーマとする授業回を設けているのは、本学への帰属意識の涵養を狙ったものである。これに関連して、本授業は8クラスからなるが、他学部他学科の学生とも交流できるようなクラス指定を行うことで、全学横断的な仲間づくりを行うきっかけともなるよう、他学部他学科の学生との交流ができるようにクラス指定を工夫した。授業終了後、本学の教育目標7項目をスケールとしてその目標達成度をアンケート調査したところ、概ね達成されたとの解答がえられた。			



テーマ	立命館大学における入学前教育			
学校名	立命館大学			
発表代表者	山岡 憲史			
連名発表者	吉岡 路	岡本 詠里子		
キーワード	接続教育		入学前教育	
	ポータルサイト		プレ・エントランスデー	
概要	立命館大学教育開発推進機構では、特別入学試験による合格者に対して、多様な入学前教育を提供しています。2012 年度に工夫して改善した取り組みも含めて、現在の取り組みについての報告を行います。			



テーマ	京都外国語大学における宿泊 FD の取組	
学校名	京都外国語大学/京都外国語短期大学	
発表代表者	羽根田 知子	
キーワード	宿泊研修	全学 FD
	情報共有	教員・職員の連携
概要	本発表では、京都外国語大学の全学 FD について紹介した上で、特徴的な取組である宿泊 FD について詳細に報告する。宿泊 FD は 2000 年に開始された取組で、現在 9 月中旬（秋学期が始まる 1 週間前）に、1 泊 2 日でホテルにて実施しており、基本的に専任教員が全員参加する。 初日は全体会として、外部講師による基調講演、学内教員によるパネルディスカッションなどを行っている。ここでは、大学教育の現状を学んだ上で、学内の問題（カリキュラムの問題、プロジェクトの進捗状況など）について情報共有、議論を行なうことが目的である。初日の夜にはラウンドテーブルとして、教員がテーマを決めて自由に議論できるようにしている。 2 日目は、初日の全体会と連動する形で 5 つ前後の分科会を設定し、3 名程度の教職員による報告、自由討論を行なっている。 参加者の満足度は年々向上しており、2011 年度のアンケートでは、全体評価の平均が 3.55（4 件法）であった。	

京都外国語大学における宿泊FDの取組

京都外国語大学における宿泊FDの取組
京都外国語大学 FD委員会（報告者：羽根田知子）
fd@kufs.ac.jp

■FDの経緯

2003年～ 授業支援・評価実施のための小委員会
2008年～ FD特別委員会
2012年～ FD委員会
10名前後の教員、5名前後の職員が委員として活動

■FDの目的

9月 宿泊FD（1泊2日）
2月 学内FD（ホスターセッション）
3月 授業改善打ち合わせ会
4月・12月 授業改善アンケート
随時 テーマを絞った研修会（ゼミ運営、発達障害の対策など）

■宿泊FDの概要

目的
普段とは異なる環境で、教育に関する議論をじっくり行う
実践的な改善点をあげるとともに、教員同士の結びつきを高める

9月中旬（秋学期が始まる1週間前）に、1泊2日で行う
教員は基本的に全員参加

初日の午後
・外部講師による基調講演（賞田 弘一氏）
・学内教員によるパネルディスカッション（カリキュラム改訂の情報共有、議論etc.）

初日の夜
・ラウンドテーブル（教員がテーマを決めて自由に議論できる場を確保）
2日目
・5つ程度の分科会を設定
・3名程度の教職員による報告、自由討論（カリキュラム改善、初音外国語の教育方法と課題、発達障害の学生の支援、学生の信頼による教育改善etc.）

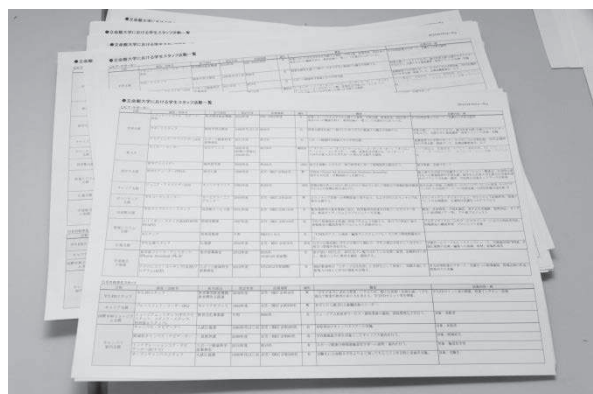
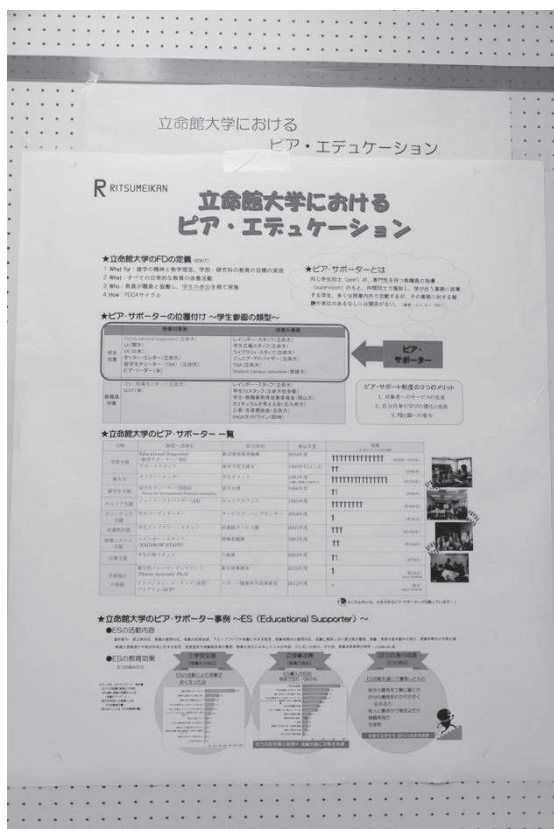
■有効性と課題

宿泊FDの評価
・参加者の満足度は年々向上
・2012年度の全体評価の平均 3.55（4件法）
・FDで情報共有・議論した結果を受けて、積極的に検討、改善される内容もある
・SDとの連携も良い、相互理解の機能を果たす

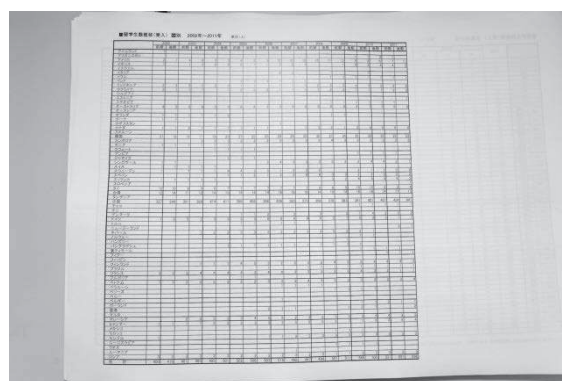
課題
・年1回のイベントであり、恒常的GFD活動との連携をどうはかっているか？
（現状、不十分なものが多い）
・宿泊で行う意義をどう考えるか？
・準備の負担・コストの問題



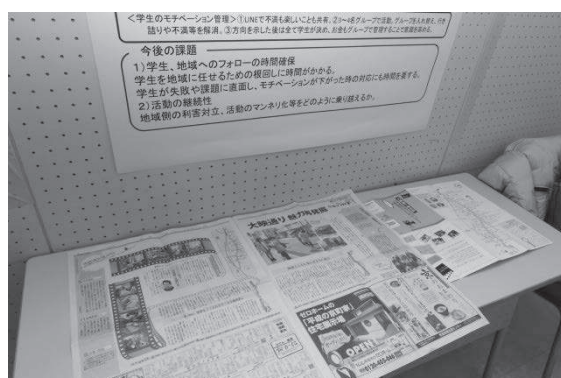
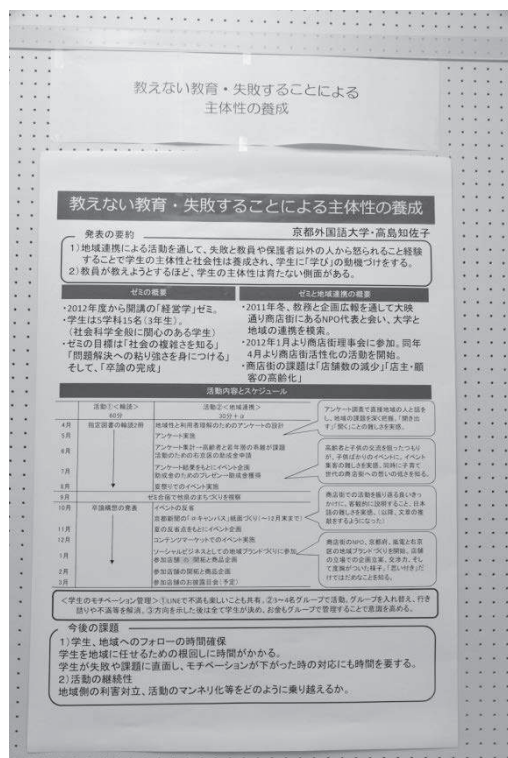
テーマ	立命館大学におけるピア・エデュケーション			
学校名	立命館大学			
発表代表者	沖 裕貴			
連名発表者	林 泰子	佐々木 浩二	河合 昭依	
キーワード	ピア・エデュケーション		ピア・サポーター	
	学生同士の学びあい		Educational Supporter	
概要	立命館大学では、歴史的にピア・エデュケーションのしくみがつくられてきました。ピア・サポーターには様々な種類があり、現在では約 3,300 人の学生達がなんらかのピア・サポートに関わっています。 ポスターセッションでは、そうした現状についての報告を行います。			



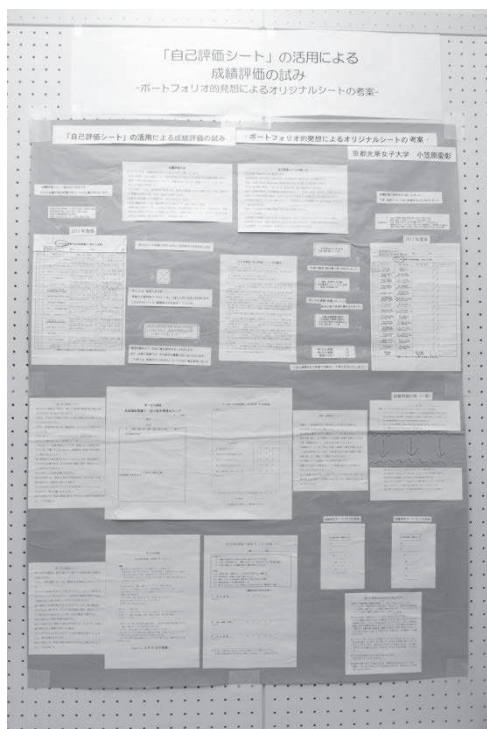
テーマ	英語教育と異文化理解促進のための 『Lunch Time English』を中心とした取組	
学校名	龍谷大学/龍谷大学短期大学部	
発表代表者	大場 智美	
キーワード	正課外授業	英語教育
	異文化理解	学習者の自律性
概要	龍谷大学短期大学部では、学生が英語を身につけ、同時に英語をとおして留学生との交流をはかることにより異文化や多文化共生について理解を得るため、2010年度から週1～2回程度、昼休みを利用した正課外教育活動「Lunch Time English」を試行的に実施している。この取り組みは、国際部をとおして他学部へも告知しており、その結果学部を問わず学生が自発的に集まっている。 このプログラムは、学生への周知方法や、学生の継続的な学習意欲への動機付け、国際部との組織的な連携方法、留学生へのメリットあるプログラム内容の提供、英語学習と異文化交流の促進方法などの研究調査を目的としている。	



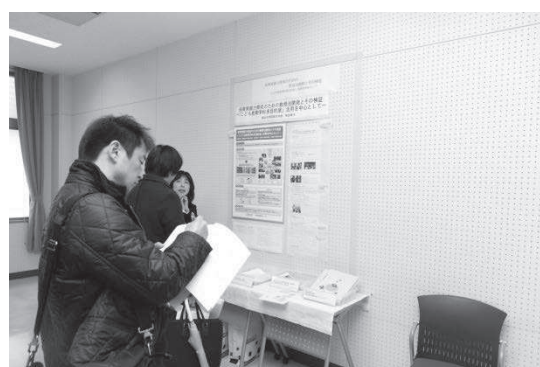
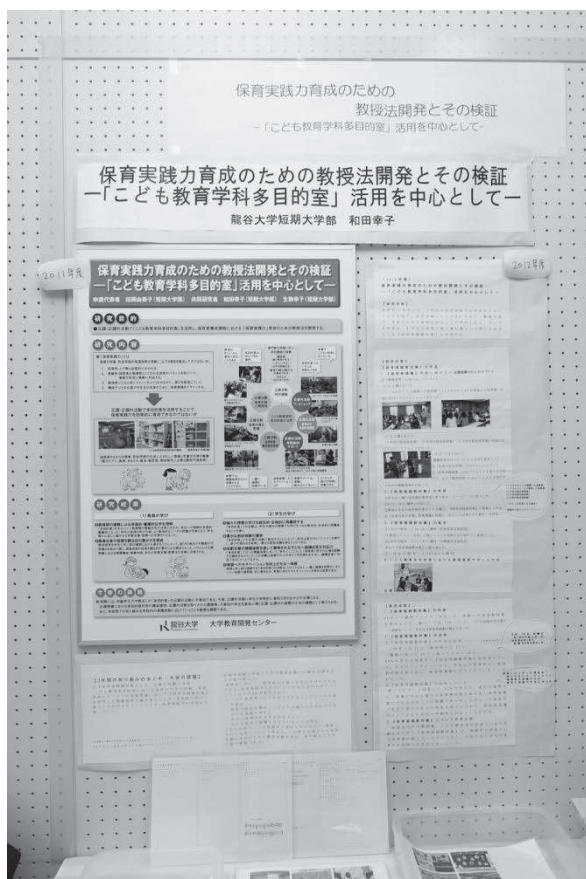
テーマ	教えない教育・失敗することによる主体性の養成	
学校名	京都外国語大学/京都外国語短期大学	
発表代表者	高島 知佐子	
キーワード	地域連携	商店街
	PBL	教えない教育
概要	自ら考え動く力を養うための地域と連携したプロジェクト型の演習事例を報告する。外国語学部では、外国語学習方法の特性から、受け身にコツコツと積み上げていく学習を得意とするが学生が多く、中には語学学習が目的化している学生もいる。そこで、学びと社会の接続を学生が自ら考え、そのために必要な知識を自ら獲得することを目的に、商店街との連携によるプロジェクト型の学習を導入した。教員は「知識を提供する人」「教える人」ではなく、地域と学生を結び、活動の場を提供する「コーディネーター」として関与する。2012年4月より実施してきた本学3年次生による活動（地域と商店街が抱える問題発見から解決策の実践までの過程）、活動過程で発生した課題、学生の変化等について説明する。この活動から得た、教員が教えないこと、学生が失敗をすることによって主体性が養成される可能性を提示する。	



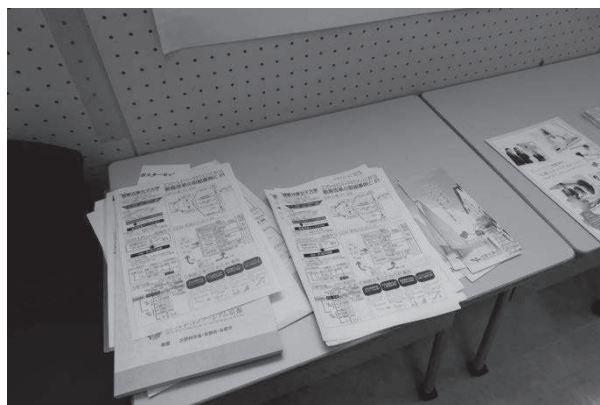
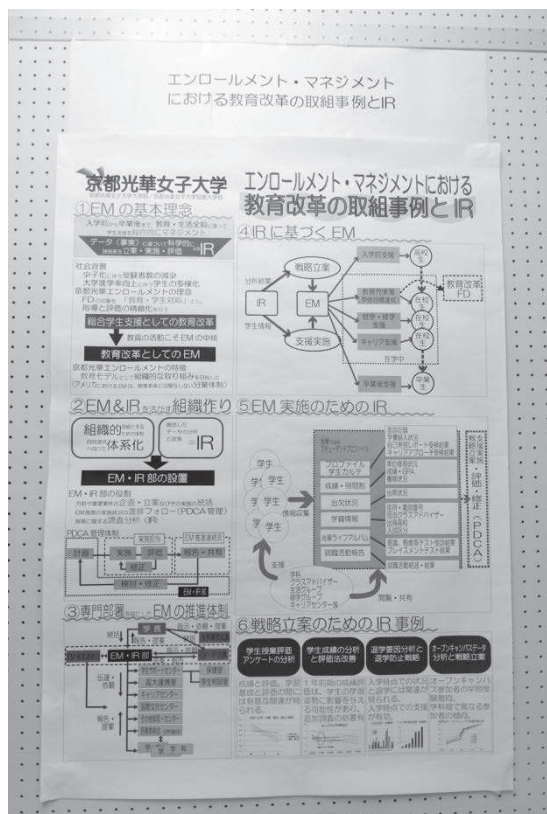
テーマ	「自己評価シート」の活用による成績評価の試み -ポートフォリオ的発想によるオリジナルシートの考案-	
学校名	京都光華女子大学/京都光華女子短期大学	
発表代表者	小笠原 慶彰	
キーワード	ポートフォリオ	自己評価シート
概要	本発表では、半期 15 回の授業について、学生が系統的に「自己評価記録」を蓄積することをポートフォリオ的発想と捉える。その前提に立って新たに考案したオリジナルシートを実際の授業で試行的に利用し、それによる成績評価を実施した事例を報告する。 なお、このシートは、学生の自己評価を促すだけではなく、教員も並行的に毎回の教育活動を評価できるようにすることを目的にしている。 具体的には、15 回分のコメントシートを A4 サイズにまとめたというイメージである。ただ、①学生が講義当初から毎回のテーマを認識できるだけではなく全講義過程における位置づけを把握できること、②講義の進行とともに、学生自身のコメントやそれに対する教員のコメントだけではなく、それまでの自己評価点の蓄積を把握できる一覧性に優れている点が異なる。 最終的には自己評価の蓄積を一定の割合で成績評価に反映させる。 本発表では、2012 年度に試行した自己評価シートの実例と 2013 年度用改定版を提示して、そのメリット、デメリットを考察する。	



テーマ	保育実践力育成のための教授法開発とその検証 -「こども教育学科多目的室」活用を中心として-	
学校名	龍谷大学/龍谷大学短期大学部	
発表代表者	和田 幸子	
キーワード	正課・正課外活動	保育実践力
	多目的室	学生の学び
概要	本研究は、龍谷大学大学教育開発センター「自己応募研究プロジェクト」の一環である。保育者養成課程の学生が正課の授業で学んだことを、保育室と見立て児童文化財を整備した「こども教育学科多目的室」において正課外活動として自主演習する体制を作ることを試みた。そのことによって、保育者養成教育において①人や物と応答的にかかわること、②こどもと共にイメージをふくらませながら遊びを楽しみ創造していくこと、③場面や状況に柔軟に対応すること、④保育者の願いとこどもの思いの双方向で保育環境を構成すること、といった保育実践力の育成を行なうことを目指した。保育・教育実習を終えた学生へのアンケート、インタビューの実施結果によって、「こども教育学科多目的室」での学生の自主演習は、協同的な学習となり、保育実践力を育成する可能性をもつことが明らかになった。	



テーマ	エンロールメント・マネジメントにおける教育改革の取組事例と IR			
学校名	京都光華女子大学/京都光華女子短期大学			
発表代表者	山本 嘉一郎			
連名発表者	相場 浩和	阿部 一晴	宇野 哲司	徳山 昌子
	橋本 智也			
キーワード	エンロールメント・マネジメント		教育改革	
	IR			
概要	本学では総合的な学生支援策として「エンロールメント・マネジメント」（以下、EM）を推進している。その中で、教育改革として、カリキュラム改革、組織的教育、教育方法の改善、教員の教育力の向上に取り組んでいる。本発表では、その取組の全容を紹介するとともに、その中で実施している主要な活動として、初年次教育、質の保障としての成績評価の厳格化、課外学習活動について事例を紹介する。また、EM の政策立案、実施、検証はデータに基づくべきであるとして IR に取り組んでいる。その概要といくつかの成果について紹介する。			



テーマ	京都産業大学における教職協働による質保証の取り組み			
学校名	京都産業大学			
発表代表者	藤原 めぐみ			
連名発表者	児玉 英明	松井 きょう子		
キーワード	教職協働		質保証	
	学習成果実感			
概要	当部署では「教育の質向上」を目的に本学におけるFD活動を支援している。今回の発表では特徴的なものを中心に紹介する。 ・学部の主体性を尊重した「学習成果実感調査」を実施 （学部のカリキュラム改善に有用なものになるよう、設計の段階から学部で「実施計画」を策定、「結果分析・改善報告書」を提出。その後教員が次学期の授業改善等に活用する。アンケート用紙は全学統一・学部独自・教員独自設問の三層構造である。） ・全学FD/SD研修会～発達障害のある大学生の支援について～ （教員・職員・学生の三者がそれぞれの立場からパネルディスカッションを実施。）			

京都産業大学における教職協働による質保証の取り組み

～教育支援研究開発センターの主な活動紹介～

教育支援研究開発センターの機能
教育支援研究開発センターのミッションは、教育の質を向上させることである。本センターの特色は、教育改善の活動を、ボトムレベル・ミドルレベル・トップレベルの三層に分けて色分けし、対応する教職員がタッグを組むことである。教育改善に取り組んでいる。

事例1：学生FDスタッフの活動支援

【目的】
・教員・職員・学生の三者が、互いの立場を超え意見交換ができる場を提供
・授業改善に、学生の視点を取り入れる必要性があるとの問題意識から、教員・職員・学生の三者で認識を共有
【内容】 (平成24年度実施)
・「Presented 希望共創プロジェクト」実施
～京都産業大学をどう変えていく？～
・学生FDサポーター2012選考
・10月開催「FD学生」の活動の場
・学内のファシリテーション工房で研修を受けた学生が、教員・職員・学生の対話を促進
H20文部科学省「新たな社会的一対一対応した学生支援プログラム」
「京都産業大学ファシリテーション工房」の活用・ファシリテーションの活用による学生支援

事例2：FD/SD研修会の企画・運営

【目的】
・全学的な知識共有、問題意識の共有
・専攻年数に応じたボトム・ミドル・トップの三層構造のFDプログラム開発
・「連携・グループワーク」による各学部FD/SDの促進
・教職協働のファシリテーションの活用

【内容】
・FD研修会 (平成23年度実施)
目 的：文部科学省の高等教育政策の動向を把握、他大学のFD・プラクティスの共有と自己点検・評価の促進
テマ：「教職協働から見るFD/SDの活用と今後の方向性について」
講 師：文部科学省高等教育政策研究センター 専門員 田井 道博
対 象：本学専攻職員 (専攻10～15年度)

・SD研修会 (平成23年度実施)
目 的：京都産業大学の教職協働の推進、他大学のSD・プラクティスの共有と自己点検・評価の促進
テマ：「教職協働から見るSDの活用と今後の方向性について」
講 師：京都産業大学 位置付センター(事務局長 上杉 道世氏
対 象：本学専攻職員 (専攻15年以上)

・全学FD/SD研修会 (平成24年度実施)
目 的：専攻・学生に対する教職協働の推進、他大学のFD/SD・プラクティスの共有と自己点検・評価の促進
テマ：「教職協働から見るFD/SDの活用と今後の方向性について」
講 師：京都産業大学 位置付センター(事務局長 上杉 道世氏
対 象：本学専攻職員

事例3：高等教育リソース機能の整備

【目的】
・教職協働による各専攻の教育改善に向けた課題解決のための資料提供
・高等教育に関する書籍・雑誌・新聞等の一元管理
・学長室の中に高等教育リソースルームを設置
・高等教育政策の調査を中心とした競争的資金の申請支援
例) グローバル人材育成推進事業
「グローバル社会で活躍する理系産業人の育成」
「大学間連携共同教育推進事業」
「産学連携によるグローバル人材の育成と地域産学連携の推進」

【内容】
・教員向け
初年次教育に関する他大学のカリキュラム調査 (H24：文化学部)
授業アンケート・学生調査に関する訪問設計支援 (H24：全専攻)
・職員向け
教育情報の公開義務化(対応)HPの改訂支援 (H24：広報担当)
中教協の協議事項(大学文科系)に関する情報提供 (H24：学長室)
例) 第1回SD研修会 (平成24年度実施)
テマ：「高等教育政策の動向と教育改善に必要な基礎知識の共有」
・教員向け
「高等教育フォーラム」の発行
学内のグッドプラクティスの発信
例) H24関西地区FD協議会での発表
①「学部の主体性を尊重した組織的FDを促進する授業アンケート」
②「キャリア教育」におけるファシリテーションの活用
③「学生情報」の一元化による初年次修学支援システムの構築
・学部別単位基準を指標とした教職協働

事例4：対話を重視する「学習する組織」

【目的】
・全学的な視点から知識の共有、問題意識の共有
・学長室(教育支援担当)と学部事務室との対話促進
・対話重視した「学習する組織」の構築

【内容】
・専攻・学生に対する教職協働の推進、他大学のFD/SD・プラクティスの共有と自己点検・評価の促進
テマ：「教職協働から見るFD/SDの活用と今後の方向性について」
講 師：京都産業大学 位置付センター(事務局長 上杉 道世氏
対 象：本学専攻職員

事例5：「学習成果実感調査」の実施

【目的】
・成長の実感に関する学生自身の自己評価
・学部のカリキュラム改善・重点プログラムの洗練
(例) 経営学部の初年次プログラム調査、全学共通科目「日本語表現」

【内容】
・専攻・学生に対する教職協働の推進、他大学のFD/SD・プラクティスの共有と自己点検・評価の促進
テマ：「教職協働から見るFD/SDの活用と今後の方向性について」
講 師：京都産業大学 位置付センター(事務局長 上杉 道世氏
対 象：本学専攻職員



テーマ	授業外学習時間とラーニング・アウトカムズとの関連 立命館大学の教学 IR を手がかりに			
学校名	立命館大学			
発表代表者	石本 雄真			
連名発表者	辰野 有	小野 勝大	川那部 隆司	鳥居 朋子
キーワード	学びの実態調査		リサーチ・クエスチョン	
	学生の学修時間		IR レポート	
概要	政策的な論点として「十分な質を伴った主体的な学修時間」の確保が課題とされ、学修成果の可視化、ラーニング・アウトカムが質保証の中心的な課題となっています。 そうした課題を踏まえて、立命館大学教育開発推進機構では、教学 IR プロジェクトにより各学部と協力して教学に資する調査・分析を行っています。 ポスターセッションでは、その取り組みの一部を紹介します。			

授業外学習時間とラーニング・アウトカムズとの関連
—立命館大学の教学IRを手がかりに—

石本 雄真・辰野 有・小野 勝大・川那部 隆司・鳥居 朋子
立命館大学教育開発推進機構

背景

- ★大学教育をめぐる課題
 - 会ユニバーサル・アワーズ、学生集団の多様化
 - 会説明責任、データに基づく教学マネジメントへの要請
 - 会教育の質保証、内部質保証システムの（再）構築への関心の高まり
- ★質保証の中心的課題＝学修成果（ラーニング・アウトカムズ）の可視化
 - 会中教養大学分科会大学教育委員会（審議まとめ）
 - 『学修成果を伴った主体的な学修時間』（2012）
 - 主体的に考え力を育成する大学へ
 - ★キーワード「質を伴った学修時間の増加」

★IRが果たす役割

1. 学生の授業外学習時間およびラーニング・アウトカムズの把握
2. 授業外学習時間に影響する関連要因の特定（＝介入点の発見）
3. 改善への施策を描き、具体的施策を構築

目的

★学生の立命館大学の「学びの実態調査」を手掛かりに、上記役割の1と2に重点を当て、授業外学習時間に影響する関連要因を明らかにする。

方法

会対象：立命館大学の9学部1～4年生6,552名
会データ：「第3回学びの実態調査（在学生）」で得られた、1日あたりの授業外学習時間、授業経験、授業への取り組み、成績データ（GPA）は、調査において学籍番号の記入を求め、後から収集。
※調査実施の方法や対象学年は学部によって異なる。

★しかしながら～
1週間あたりの学修時間は減少傾向

※中教養大学分科会調査の結果（山田、2012を基に作成）



結果 ① 学年進行に伴う授業外学習時間（1日あたり）の変化

→JFS（山田、2012）の結果と比較すると、立命館大学の学生の授業外学習時間は少し低い。

② 授業外学習時間とGPAとの関係

→3、4年生においては、授業外学習時間が長い学生ほどGPAも高くなる傾向がある。

→1、2年生においては、授業外学習時間が長時間（1日あたり5時間以上、1週間あたり35時間以上）の学生のGPAは決して高いとは言えない（1時間未満の学生と同等度）。

学年進行し、2年生の授業における積極性と授業外学習時間、GPAとの関係

→1、2年生において、授業外学習時間が長く、GPAも高い学生は、授業においても積極的に活動に参加し、自分の意見を述べたり、自主的に興味を持ったことについて学習を進めている。

→授業外学習時間が長く、GPAの高い学生は、授業においては積極的な活動参加や意見の主張、自主的な学習をあまり行っていない。

まとめと考察

★実践への示唆：授業外での学習成果を、授業内でも発揮できるような工夫の必要性→授業外での課題と授業内容の反復的な接続

★IRへの示唆：授業外学習の定義の問題：どこまでが「授業外学習」に含まれるのか？→学習内容、学習環境の調査



テーマ	学生 FD スタッフ「燦（SAN）」活動紹介			
学校名	京都産業大学			
発表代表者	乙倉 孝臣			
連名発表者	南 太貴	吉永 康矢	林 綾華	
キーワード	学生 FD		共創風土の醸成	
	学生の主体的な学びの促進		教職学協働	
概要	授業改善には学生からの意見が必要との問題意識から、京都産業大学では、平成 23 年 6 月に学生 FD スタッフ（愛称：「AC 燦（SAN）」）を結成し、現在 45 名の学生が活動している。 学生・教員・職員の枠を超えて、本学について語り合えるよい「場」と「機会」を提供することを目的とし、今年度に AC 燦が企画実施した 2 つの学内イベント（①燦結成 1 周年記念イベント「京都産業大学にとって白熱教室とは？」、②燦 presents「京産共創」プロジェクト～京都産業大学をどう創っていくか～）を中心に、本学における学生 FD 活動について、燦の学生自らが発表する。			

京都産業大学
学生FDスタッフ「燦(SAN)」活動紹介



1. 活動目的

授業や教授法を対象とした狭義のFDにとどまらず、学生・教員・職員が一緒になって、よりよい京都産業大学を創っていくという広義のFDやODの視点を持って活動していきたいという思いから、「大学共創」をスローガンに掲げて活動している。

2. 活動内容

<広義のFD・OD>

「京産共創」プロジェクトI
京都産業大学をどう創っていくか議論
(2011年12月) 参加者：104人

「京産共創」プロジェクトII
第1弾で学がった主要な意見についてさらに深く議論
(2012年12月) 参加者：89人

<狭義のFD>

「京都産業大学にとって白熱教室とは？」
ハーバード大マイケル・サンデル教授の教授法を題材に、双方向型授業についての議論
(2012年6月) 参加者：96人

その他、「共創データブック」の作成、学会や学生FDサミットでの発表、「高等教育フォーラム」等の学術誌への投稿

3. 京都産業大学 学生FD活動の特色

「アホなことを見事に、マジメなことを楽しく。」をモットーに取り組んでいる。

ファシリテーション能力育成

キャリア教育研究開発センターF工房の専門スタッフからファシリテーションについて学ぶ機会を設け、合宿や研修会、模擬しゃべり場で繰り返し実践を積み重ねることで、立場が異なる参加者間の議論が、円滑に進むよう努力している。

実施後の「振り返り」の重要性

アンケートや「しゃべり場」での議論内容を「共創データブック」にまとめ、学内外の学生・教職員に配布している。また、学会や学生FDサミットでの発表、教育支援研究開発センター刊行の紀要「高等教育フォーラム」への投稿等を行っている。

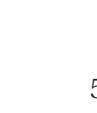
4. 今後の課題と展望

イベントで出されたアイデアは全学的に学生や教職員が参画しなければ実現できないものが大半を占めている。まずは、これまでのイベントに参加した高意欲者層を対象に、イベントの成果のフィードバックを行い、表現に向けたビジョンの共有と、意見交換ができる機会を設けることが必要だと考える。他の学生・教職員の意欲を促すような仕掛けが、今後さらに必要になると考える。









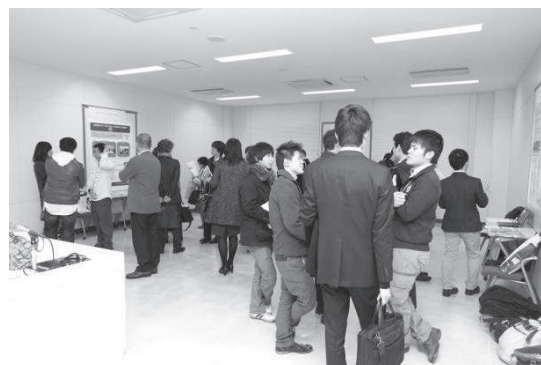




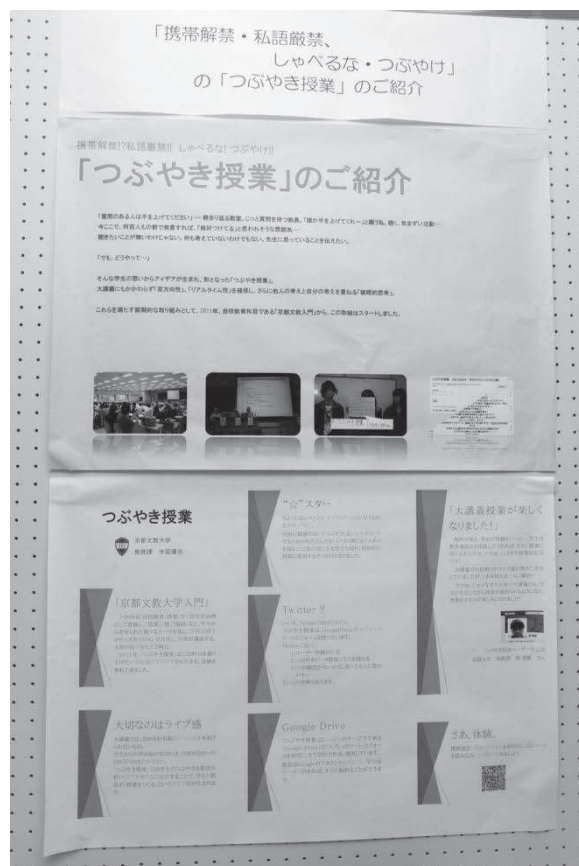








テーマ	「携帯解禁・私語厳禁、しゃべるな・つぶやけ」 の「つぶやき授業」のご紹介			
学校名	京都文教大学			
発表代表者	寺尾 健志			
連名発表者	村山 孝道			
キーワード	大講義改善		双方向・リアルタイム	
	IT		SNS・つぶやき	
概要	大講義の授業は、①授業が一方通行になること②受講生の主体性がうまくに くいこと③逆に私語がうまくやすいこと などが課題とされています。こ の問題を Google のスプレッドシート（アンケート機能）を使用し、受講生 が授業中に「つぶやく」ことで、授業に「双方向性」「リアルタイム性」「主 体性（授業への参加意識）」「複眼的思考（他の受講生の考えを知る）」を作り だす、画期的な「つぶやき授業」のシステムを紹介します。導入費用0円、 （Twitter 等とは違い）アカウントの取得も不要。「京都文教入門」（受講者数 約 250 名）で 3 年間の運用実績をもっています。			



テーマ	立命館大学における学生 FD スタッフの取り組み			
学校名	立命館大学			
発表代表者	学生 FD スタッフ			
連名発表者	辰野 有	豊桑 清香		
キーワード	学生による FD		学生 FD サミット	
	しゃべり場		FDS Report	
概要	立命館大学では、大学の授業における様々な問題の改善や授業の質の向上などを目的とした学生団体として、学生 FD スタッフが組織されています。彼らが主催する「学生 FD サミット」は、2012 年度には 430 名に及ぶ全国の大学からの学生・教職員の参加を得るまでの規模に発展しています。 ポスターセッションでは、学生 FD スタッフの組織や取り組みについての報告を行います。			

